

第109回 記者懇談会実施概要

- 1 日時 平成28年5月18日(水) 15:00~17:00
- 2 場所 関西大学千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室
- 3 内容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00~16:00)

・吾妻 重二 文学部教授

発表テーマ「関西大学の知的ルーツ：泊園書院^{はくえんしょいん}」

・和田 隆宏 システム理工学部教授

発表テーマ「放射線の生体影響の新しい数理モデル」

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00~17:00)

- ① 社会空間情報科学研究センターの設立について 資料1
- ② 学生センター主催創立130周年記念行事の開催について 資料2
- ③ 平成27年度学生生活実態調査報告書の発行について 資料3
- ④ 平成28年度科学技術分野の文部科学大臣表彰の受賞について 資料4
- ⑤ 第13回三大学連携事業について 資料5
- ⑥ 博物館春季企画展学術シンポジウムの開催について 資料6
- ⑦ 創立130周年記念行事 関西経済連合会・関西大学社会安全学部共催
シンポジウム「日本とエネルギーの未来を考える」の開催について 資料7
- ⑧ 関大生の活躍について 資料8

4 大学側出席者

楠見晴重学長、吾妻重二文学部教授、和田隆宏システム理工学部教授、
田中成典総合情報学部教授、窪田諭環境都市工学部准教授、
黒田勇学生センター所長・社会学部教授、立仙和彦総合企画室次長、
依藤康正広報課長、宮武明生学長課長 他

5 参考資料

- (1) 関西大学通信 第449号、第450号
- (2) 第36回「地方の時代」映像祭2016 コンクール作品募集リーフレット
- (3) 第36回「地方の時代」映像祭2016 フォーラムチラシ
- (4) 行事予定表(5月~6月)

以上

【次回(第110回)記者懇談会開催予定】

日時:平成28年7月8日(金) 15:00~17:00

場所:千里山キャンパス 100周年記念会館 第2会議室

関西大学の知的ルーツ：^{はくえんしょいん}泊園書院

文学部教授 吾妻重二

【概要】

大阪は「商人の町」といわれるが、実はきわめて教育熱心な土地柄でもあった。江戸時代、藩校をもたなかった大阪では民間の教育施設、すなわち私塾や寺子屋が発達し、教育史家によって「大阪市内寺子屋の隆盛は殆ど全国に比類なく大江戸のそれをも凌駕したほどである」と評されている。

泊園書院は江戸時代後期の文政8年（1825）、四国高松藩出身の藤澤東暎^{ふじさわとうがい}が大阪市中の淡路町に開いた漢学塾であり、幕末期には懐徳堂をしのぐ大阪最大規模の私塾となった。

東暎の子の藤澤南岳^{なんがく}は明治時代、当代随一の学者として名声高く、書院の黄金期を作った。全国から集まった門人は五千人にのぼるといふ。南岳は「通天閣」や日本最初の民間幼稚園である「愛珠幼稚園」、森下「仁丹」などの命名者としても知られ、大阪文化の顔であった。南岳の死後も、南岳長男の黄鵠^{こうこく}、次男の黄坡^{こうは}、黄坡義弟の石濱純太郎が書院経営を受け継ぎ、黄坡が死去する昭和23年（1948）まで120年余の長い歴史を刻む。

泊園書院は、関西大学のルーツの一つでもある。第4代院主の黄坡は大正11年（1920）、関西大学予科開設と同時に講師となり、ついで専門部文学科の中心教授となった。関大最初の名誉教授でもある。石濱も大正15年（1926）以降、専門部講師となり、戦後、文学部教授。また関大の文学博士第一号となった。昭和26年（1951）、泊園書院の豊富な蔵書が本学に「泊園文庫」として寄贈され、これが機縁になって東西学術研究所も設立される。このようにして泊園書院の人文学の長い伝統が本学に合流するのである。

泊園書院からはまた、多彩な門人が輩出している。陸奥宗光（外相）、岸田吟香（ジャーナリスト）、武田長兵衛（武田薬品創業者）、福本元之助（ユニチカ創業者）、伊藤忠兵衛（伊藤忠創業者）、松岡興毅（日大初代学長）、山田喜之助（中央大学創立者の一人）、幣原坦（台北帝大初代学長）、牧野謙次郎（早大教授、漢学者）、島田鈞一（東京文理大教授、漢学者）といった、幕末・近代の発展を担った実業家や学者が数多く出ている。NHKの「あさが来た」に登場する白岡あさの娘・千代（本名は広岡亀子）も泊園門人であった。

泊園書院の名はまだ広く知られてはいないが、最近の研究成果をふまえ、この機会に「大阪に泊園書院あり！」と知っていただきたい。

【プロフィール】

1956年茨城県生まれ。関西大学文学部教授。専門は儒教史、伝統儀礼、学校史など。早稲田大学第一文学部卒業、同大学院文学研究科博士課程後期課程単位取得後退学。1997年4月以降、現職。博士（文学、早稲田大学）、博士（文化交渉学、関西大学）。著書に『朱子学の新研究』『宋代思想の研究』『朱熹《家礼》実証研究』（中国語）、編著に『東アジアの儀礼と宗教』『泊園書院歴史資料集』『泊園文庫印譜集』、訳書に『中国哲学史 成立篇』『馮友蘭自伝——中国現代哲学者の回想』1・2など。趣味はバドミントン観戦。

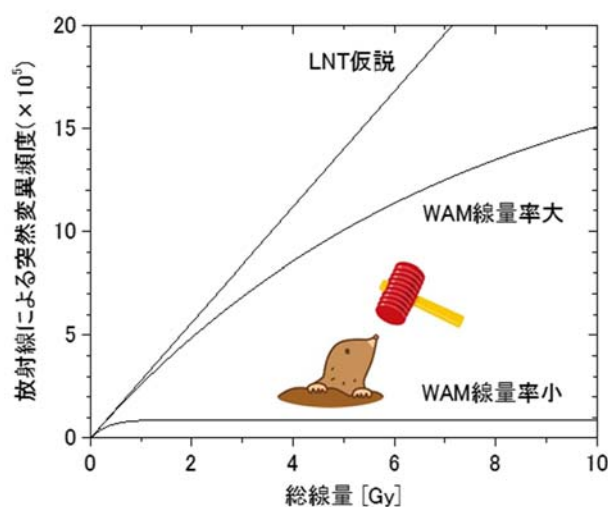
放射線の生体影響の新しい数理モデル

システム理工学部教授 和田隆宏

【概要】

福島第一原子力発電所での事故に伴う大量の放射性物質の放出によって、放射線の人への影響に関する定量的な知見の社会的な重要性が高まっている。私たちは、放射線の生体影響を定量的に扱える数理モデルが必要だと考え、「もぐらたたきモデル」と呼んでいる新しいモデルを提唱した。このモデルは、広く用いられている「直線しきい値なし (LNT)」仮説に対する疑問から生まれたもので、生物特有の「修復」機能の重要性に着目した点が特徴である。特に、低線量率の放射線に長期間被ばくする場合には、LNT 仮説と大きく異なる結果を与える可能性があり、学会でも注目されている。

もぐらたたきモデル (WAM モデル) は、突然変異の発生と消滅を考えるもので、発生した突然変異 (もぐら) が修復や細胞死 (ハンマー) によって減少する過程を記述する数理モデルである。WAM モデルでは、変異細胞の数が減少する速さが変異細胞数自身に比例する一方、変異細胞が発生する速さは変異細胞数に関係しないため、放射線によって変異細胞数が増えるとそれを減らそうとする働きも大きくなり、やがて発生率と減少率が釣りあう。これまでに、ショウジョウバエやマウスの放射線による突然変異実験の再現に成功している。



左図は、人工放射線による突然変異の頻度を、総線量の関数として示したもので、WAM モデルと LNT 仮説の結果を比較している。WAM モデルでは線量率によって突然変異の頻度が変わり、線量率が低ければ長い時間をかけて高い総線量を浴びても天井となる値以上に増加しないという特徴がある。一方、LNT 仮説では、突然変異は総線量に比例して単純に増加し続ける点が大きく異なり、放射線防護のパラダイムシフトとなる可能性を含んでいる。

【プロフィール】

1958 年大阪府生まれ。関西大学システム理工学部教授。専門は、原子核理論。京都大学理学部卒業、京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了。基礎物理学研究所、理化学研究所、大阪歯科大学、甲南大学を経て、2007 年から現職。理学博士 (京都大学)。これまでの主な研究内容は、原子核間相互作用の微視的研究、超重元素生成過程の揺動散逸力学による研究。放射線の生体影響の研究は事故後始めたものである。最近の趣味は蕎麦打ちとゴルフ。